

911.3
八
中

時代
模画

俳家奇人談

中

竹憲玄玄一造稿男茂庭書書卷訂

案ずるに俗名其七宿辰七宿忠なる等此武院阿の
今言雖山頼其陸の三を惟示候く忠なると云ふに

玉弓世

二まろ
さ
ら
北

寸石

あろい
ちろ

石

各公長官名

人

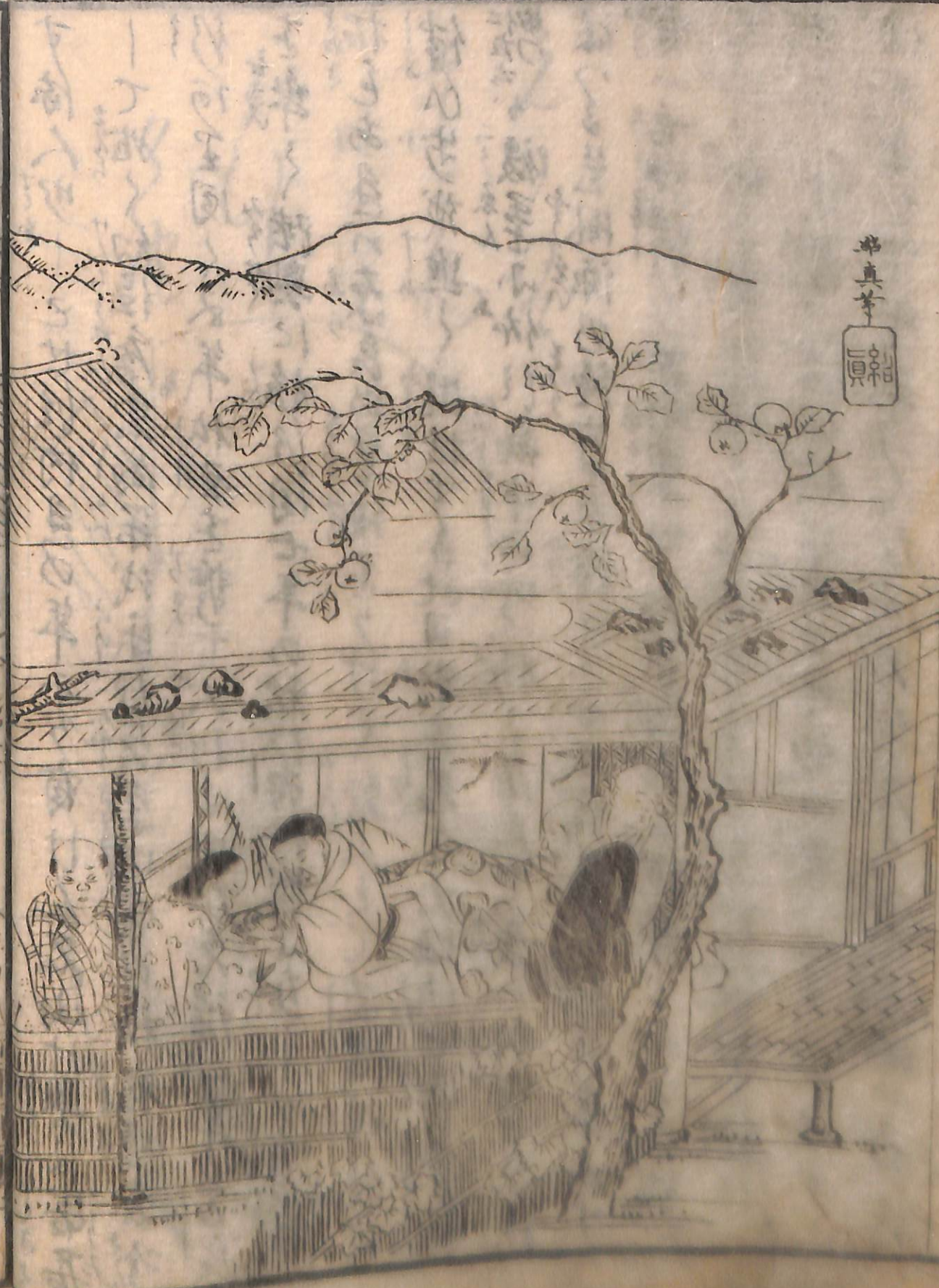
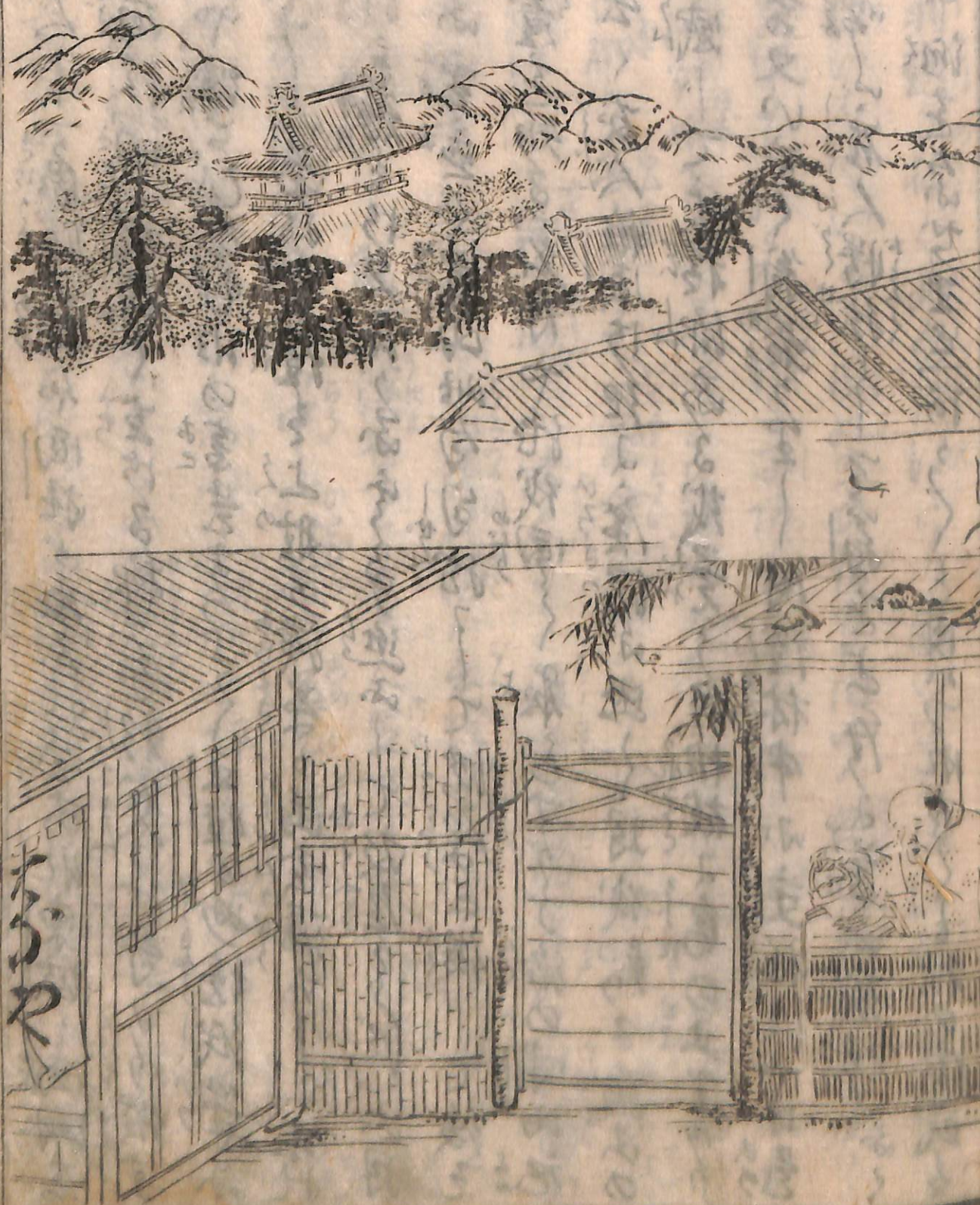
今
至
あ
い
う
う
ん

今已
三十一

昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河烏黑
 烏黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
 其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
 蕉翁真之脫漏而已 倭伴閑人



す家人も一己せに何もの年ふり有りけん石山北奥又客居
 して地く幻位腐忠幽第戎床む久摩四年の秋鹿崎志吟
 形阿全同く又年松玉を携りて大移は連びえ歸二年首良
 を舉ぐ陸奥に移は同七年の秋の將侍賀又左一が浪意
 招もあまた奈良の重傷をうけく赴んとて支考將侍戎
 侍ひ歩戎進く風托する此日病を患を大坂由安ある居
 暫ちが後重を小依は病中の吟一移は居んで爰は枯壁をうけ
 ほつる是風録乃強なり強る一七日戎をく又は兼又十
 有一鳴呼悲ひう赤此更をこたび江左又龍舉一てあり始て
 同族の妙を器記通る一能満を一王義戎侍奇又疑はむ
 光あ人戎敵は沢後代に當る空句正慶一ちうは疑るを
 後進察せしを平くた家考戎名く以て三昧と名に



華真筆
貞

日や船院どの、顔れいろ「思われくおがらある人ぞの地みれ
心変をほころぶもの」文とほは「横は」おす様うふ眼前風候
人ひく云ふ「能はず」雨や家哉同く時なく後来入る
夕涼よくど男み生れくる雄枝倫を「橋妻やゆめいふふ
為乙由が洋の什是は出るに似たり」声うれて猿け齒か「岩の
月或洋すく今令此子從妻於詩何減李王と洪宗「急盛
子て歩る」又婦「名月や夢れく人小松の輕「冬來てを
鹿野小はる鳥り奈生縦横句在る月屋「史能備の控
翁与此子也一朝不可論尽を後人あるひい思へらく晋子
調異師翁に殊不知離而合者なり蓋「支考許六の樂儀偏
多く雪作思を焦「奇哉索むといへども意解れ條陽晋子
が自放なるに及ばざるや遠「

服部嵐雪 附烈女

振袖嵐雪の泣別小振並村にお生に幼名久る助成より湯島
久米助を此處のふとわい「長里と東武はお杉店張おふは「何
又井上おお公も勅とる「生は産多樹といひり一年君
僕の信「て我第お梅里井の端「おと足濯んとするに卒「
やうに雲り雲の降来る成る「武士は足で米とく雲うふと
就生にすさみ「う素より素成難れ本お把く山色を来よん
とすは志「止ぐ「我種おと「て居宅を退の日常細衣類
雅翁等よいとる「と一素も手に携へばに佐佐木と「並唯一
風雲とたふ漂ひ出いつ「う蕉つ「梅ぐ能名を治助といふ後
嵐雪といふ「嵐れ庭の富を「でいと思ひ寄ける要さ今文
改んもおこが候「と笑あふ「度くなり妻れ名を列「といふも

仁德

鵲十六屯廿

其角

半面美人

沉香亭裡

李山白印

木乃不レ隙レあふレかゝるレ木乃

[illegible]

天下一

百花嬌語

羽卒蓋

隊土王簪

探荷

弄晚涼

探
葛

九

五



に

大に花の咲く
やうな花の咲く
やうな花の咲く
やうな花の咲く

三

に

大に花の咲く
やうな花の咲く
やうな花の咲く
やうな花の咲く

三

嵐雪此切なりと祇寂が文に記さる初より英房唐室と号せしは祇寂
 此祇寂里後より雪中庵一ふ不自新玄峯雲と号せしは祇寂
 雪千山を埋む什麼孤峯不自あるといふは雪よりなること常
 に海雲才丈へ参す并に御よりぬく才丈へ申し入るる時
 沙同て云く玄春望別送乙片語今秋归来相見了也即今如何是
 行脚眼と答て云く觀音境裡古案樹沙いはく案無古今色作麼
 生無古今色的一句前進く云く春色無高下花枝自短長沙是
 を答て休玄と号稱して参詣或退化玄はく安より可なり地
 後阿り生妻唐猶を覺するも法よりなり香法てそれ融成
 覺す法も祇寂るる人百に増するも愛物器物いむべき日
 小も生看或喰す所なきと云くはといふと悲てと此を改けり
 或日書此他日我幸ひ遊り一猶ををす人きりり日書又改り
 来く家なき法より才を知らぬと答ふ妻泣叫く悲慕
 此切なり一猶の妻いりある君此奪ひけりかこちつゝん地
 悪くち里ぬ隣女をとりふと作我告く猶のけ先を信る
 妻大より恨く交ぬ教いどみ争ふ人打寄能させて寄
 公哉和らむとや睦月はト免の交ぬいりひを人く又
 笑れてと出ると一恨ふ我石よやを内ぬれ玉をぬれとハ此
 時君よりふと有りも一とせ重陽の詠り一芙蓉名菊との
 外此名のふくもぐを晋子添く感して我生涯榮け句是
 及たは己と生より己は榮け妻哉はふ老阿生は沙のふ榮や
 此詠と此句より外を憑け里一にあり生名作老成沙翁
 集中小置とも亦何と分んや一え同や睦て夜の物語るを
 不言祝賀還在其中一蒲團をく寐する次女や东山壁言喻の

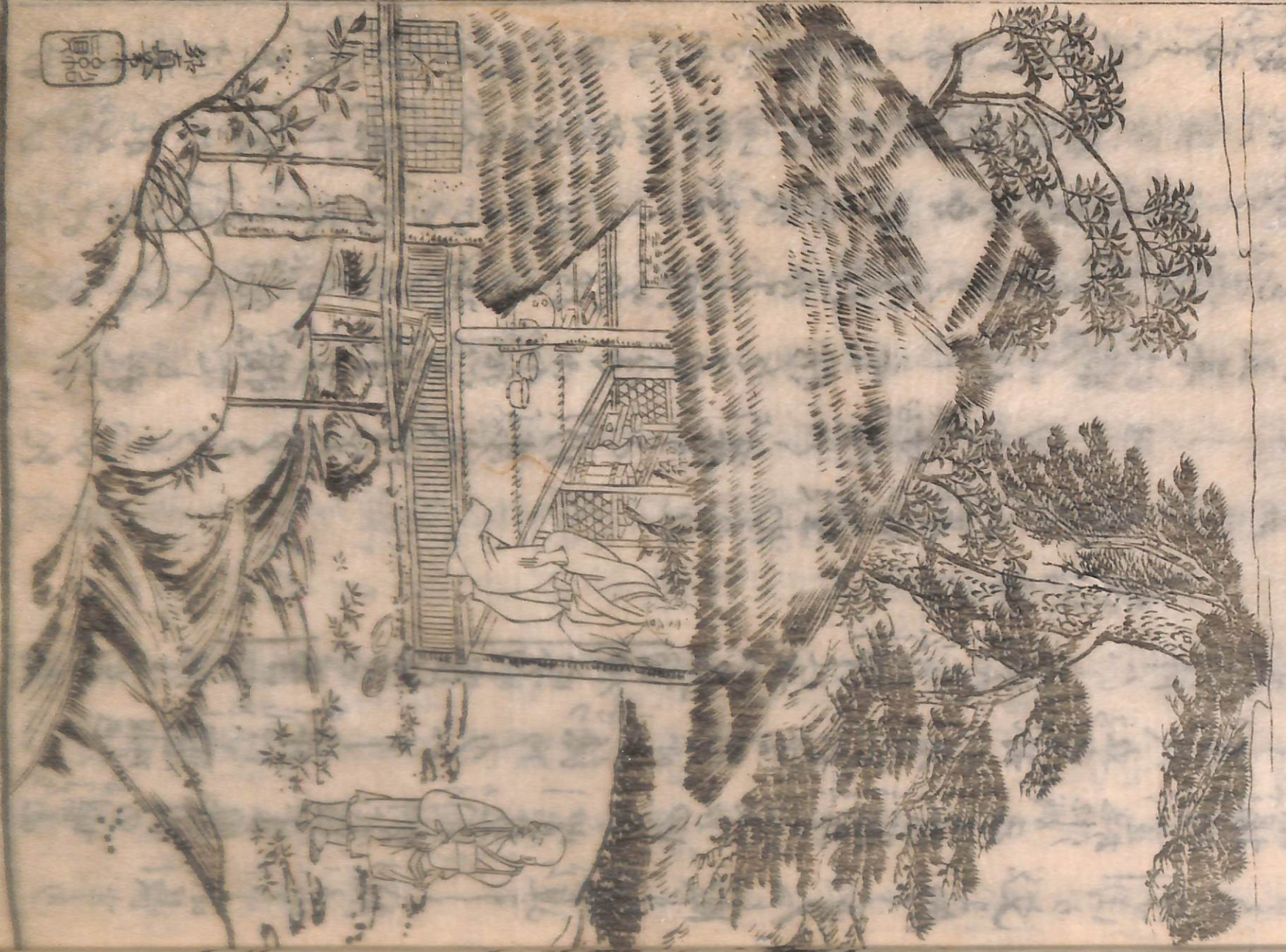
此切なりと祇寂が文に記さる初より英房唐室と号せしは祇寂
 此祇寂里後より雪中庵一ふ不自新玄峯雲と号せしは祇寂
 雪千山を埋む什麼孤峯不自あるといふは雪よりなること常
 に海雲才丈へ参す并に御よりぬく才丈へ申し入るる時
 沙同て云く玄春望別送乙片語今秋归来相見了也即今如何是
 行脚眼と答て云く觀音境裡古案樹沙いはく案無古今色作麼
 生無古今色的一句前進く云く春色無高下花枝自短長沙是
 を答て休玄と号稱して参詣或退化玄はく安より可なり地
 後阿り生妻唐猶を覺するも法よりなり香法てそれ融成
 覺す法も祇寂るる人百に増するも愛物器物いむべき日
 小も生看或喰す所なきと云くはといふと悲てと此を改けり
 或日書此他日我幸ひ遊り一猶ををす人きりり日書又改り
 来く家なき法より才を知らぬと答ふ妻泣叫く悲慕
 此切なり一猶の妻いりある君此奪ひけりかこちつゝん地
 悪くち里ぬ隣女をとりふと作我告く猶のけ先を信る
 妻大より恨く交ぬ教いどみ争ふ人打寄能させて寄
 公哉和らむとや睦月はト免の交ぬいりひを人く又
 笑れてと出ると一恨ふ我石よやを内ぬれ玉をぬれとハ此
 時君よりふと有りも一とせ重陽の詠り一芙蓉名菊との
 外此名のふくもぐを晋子添く感して我生涯榮け句是
 及たは己と生より己は榮け妻哉はふ老阿生は沙のふ榮や
 此詠と此句より外を憑け里一にあり生名作老成沙翁
 集中小置とも亦何と分んや一え同や睦て夜の物語るを
 不言祝賀還在其中一蒲團をく寐する次女や东山壁言喻の

問井書來

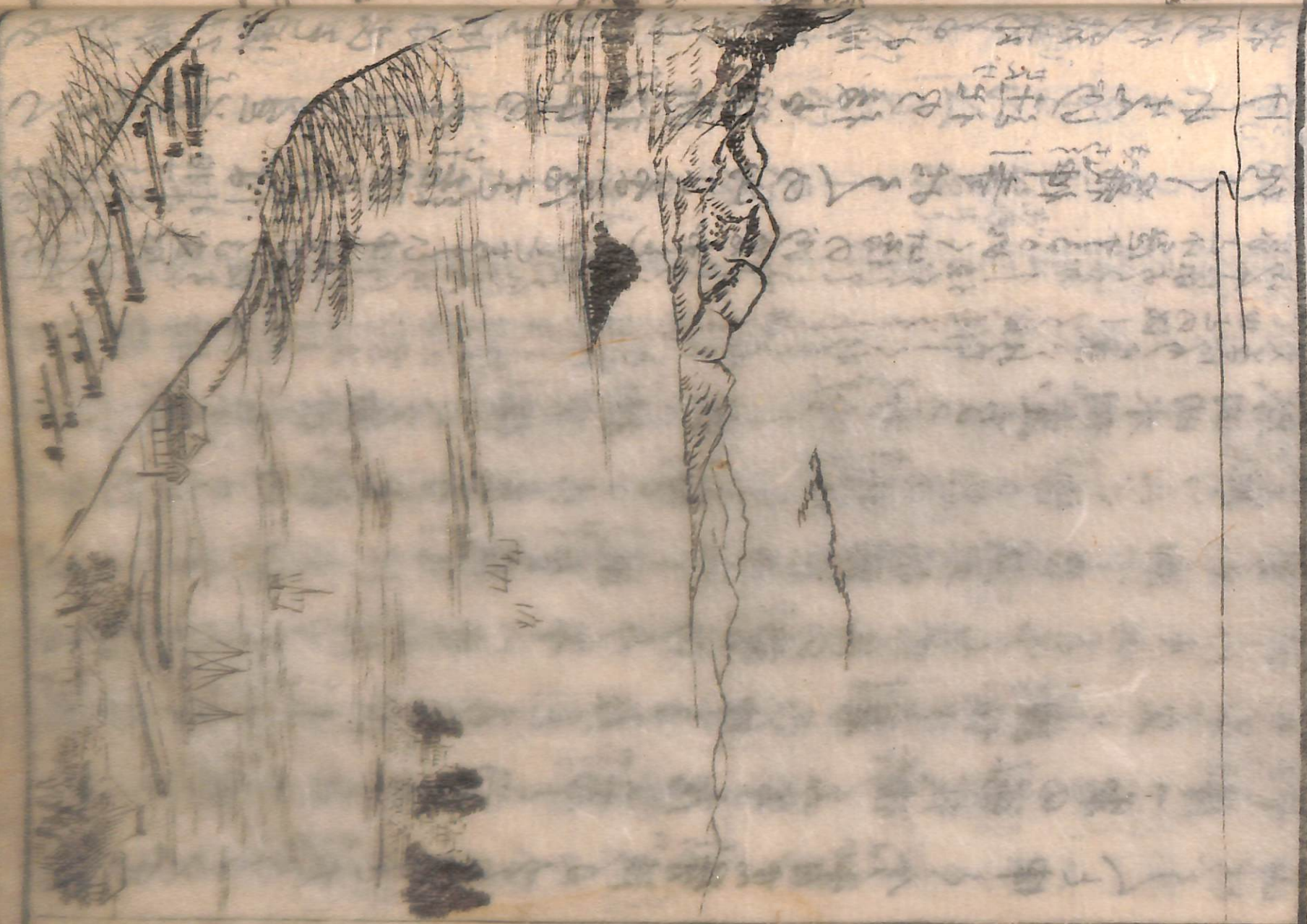
事^{あはれ}ふ^は一^は蓋^は一^は當時^は英^はの^は魁^はあり^は一^は前^は山^は中^はと^はあ^はう^は
 小^は定^はを^はて^は一^は執^はも^はて^はて^は烟^はの^は男^はを^は許^は中^はに^は来^はぬ^は本^はと^はあ^は
 れ^はを^は掩^はたり^は一^は玉^は抱^はの^は奥^はを^はつ^は一^はや^は秋^はの^は龍^は「^は虎^はの^はを^はた^はる^は
 海^は風^はを^は「^は荒^はや^は走^は王^は刺^はる^は友^はを^は所^は死^は一^は「^は後^は抄^は我^は
 作^は一^は受^は生^は流^は必^は使^は王^はに^は生^は其^は満^は切^はなる^は富^はを^は知^はる^はを^は
 生^は食^はを^は原^は材^はと^は必^はく^は聖^は紀^はを^は後^はを^は生^は食^はを^は録^は書^は一^は「^は因^はく^は
 一^は我^は家^はに^は能^は訪^はに^は遊^はぶ^は一^は世^はの^は理^はを^はい^はぶ^は一^はと^はに^は
 一^は母^は父^はと^はく^は精^はを^は我^は國^はと^は一^は「^は魚^はを^は代^はに^はて^はり^はあ^はう^はに^は
 一^は迷^は一^は「^は灰^はを^はす^は月^はに^は一^は「^は烟^はを^は嫌^はふ^はと^は何^はす^は
 一^は隣^はの^は飛^は雀^はは^は一^は「^は火^はに^は用^はん^は一^は「^はあ^は良^は法^は
 一^は「^は風^はを^は一^は「^は可^は笑^は一^は「^は支^は考^はが^は娘^はの^は記^はは^はい^はよ^はと^は来^はる^は烟^は管^はは^は
 掃^は除^はする^はの^は癖^は何^はや^は又^は世^はを^はた^はる^は隣^はを^は飛^は雀^はと^はい^はふ^はと^はあ^は

借文草

借文草とは先代々々尾陽太山の手はかり知りし家代好くは
漢を究む好くは継母の仕く孝んたる才を以て生るるおそれ
は束縛ゆつりくは之を慰む嘗て右の指小痴つけられ抑留せ
しと酒り壯年武代様しと福を家とて其時の口號多年夏屋
一蠅牛他做蜎蜎得自由火宅最慳涎沫不偶尋淡雨入林紅白の涼風
しきゆる我雲れおやとふふは華経を誦誦するより他るお
しとつふ何なるはしとて門の世んとて時く其代傳ふす我るこ
波瀾北述し招きう家一啄木やや板木代様はるる中一聖聖
も少く假此世の極楽の家一有明しと振向くは此世の家一美
さくは秋の衣もあらず里より随ふ旬生るるの作む可悦室永
元年二月に午二葉しとて此世代を家の人を去來陳代作く
因く今茲如月束は日月の州冠は残る物とて祥沙糸はり
里ぬと湖南の西秀が許より知れ生るる白推ふはぐ里洞
止たり絲奴津久くととい人若むしと我思ふは尾張の西は
生れ在山侯に仕くと常盤村名も有しとや一日お意
一人を假し竊し君父の家代思ひ出送の傍お慰ねし
きり墨滯し引替らぬる中黒渚名史邦又ゆり里五兩亭
に假寐し先少お慰ねく妙られしとあり二葉は此世の中
小石を折し並ぐは百の火煙のよと面代はしと向て吟言ね
月く此人を鉄に先少お慰ねく云ふは借是道に進み学ば
人若よとまゐるる月代紙屋より此と持とあ人りき下地
の強なるうまみはしと性善み学ぶるは代お慰ね
感有りて吟し人あやとて傳すはとけるはお慰ね



山居图
真景



斜あふに交りすく小雷鳴地よとて此吹風麻をはふちけ
れは虚室欲穿閑是宝満山雷雨震寒更と興トあられ兼い
明してあまぬ身けと我鳴くくはうふと嘆えし言案れ元
毛再を移るなり今むちし一記名れみ残るる百九十年の
い三年に据ふにし言懐るる年若然を生す惜ても程
きく此一句我手向く来くと涙あけ世に傳るれとふ記
名きく妻や三年の生ゆれ

森川評六

森川評六とは江島彦城此士一名百仲字調定師と云河松と自稱
す居城五老井と号にふき井小四郎河少一了草字藤根已記二
小揚揮豆毛純補三は雲花字四は紫芝岡評六自号風雅の癖あ
るる李田が文は知るる人と感り敏達くく融くふ長ざり

又画成解す意存も画とみく沙とあり一能傳ハ表そ才子と
素はと出けり生れ叙句よと興せり一本和は成屋記桐花最
菊ふか今々限の妻れは情や帆け船一口八月の月波さ浪や子
短二竿と死装束や古用平一着終れ方を招致忠告り哉一欄
杆小堂るや案れ乾法沙一初霜や治承江中名人公一婦入のつ
るる評六は沙翁歟後そは遺愛の標樹を伐く肯信哉
刻み是成大津の智月尼ト猶る生又ふいそく

は床敷花さす持あはせりれし一因か交存の指老るいそ
す知と無けはれ像も及延引け度翁も手小柄れらるる
き井北古本とて刻みすひらせん兼て大ちも像刻と度全
つぎし下も初案あくけむくく程又延引け度中ふ小柄
十月三日 和の後像く流屋記案もあし 評六

智月屋侯

主君の御座を忘るる事形に如く一惜を以て平飛を
重くして人小面する事や一通達を以て必死する事
をも辱罵を以て死して通達を許して一年金持の御子に
して對面せしむ代はさして辱罵を許し人々と病を
迎へて歎かぬにふり救うに難く奥に秘蔵したる御
子ちかく夢に研ぎをぬき一々御金も中絶し病に
事く悲しき事不慮にも一々御金も中絶し病に
風雅を極めた大文夫を以て時人評一食はたに匹敵せず
小死に後焉の悔一々打破屎糞並に臭氣供梵天下は
死ぬる事と思ひ一ふじきも死ぬを屎糞よりあはれ子に
己より我を以て他を以て勸めし時人評一平生の御

後中一々御金も中絶し病に
まで膚境を以て目絶し他を以て勸めし時人評一平生の御

東宮内支考

支考を以て此人は一々御金も中絶し病に
冠の冠を以て吹毛浴也春三月影攝牡丹花下風といふ御代作
字つたる御金も中絶し病に
講を以て條の御代作に如く一々御金も中絶し病に
後援を以て控えたるや當に陽山田より御代作を以て
風家に以て御代作の時一々御金も中絶し病に
不む御代作を以て御代作の時一々御金も中絶し病に
二々御代作を以て御代作の時一々御金も中絶し病に
を以て御代作を以て御代作の時一々御金も中絶し病に

す條の僧より、此の在るに、鑿子と云ふ家、又在るに、獅子老
人との支考といふ、舊名あり、主学二教に涉り、又文成
以く、句、及す、著す、而十、論、古、今、抄、皆、は、あ、と、確、編、何、り、手、抄
句、又、針、て、ハ、亦、与、汗、ハ、魯、衛、と、政、身、一、行、校、ハ、肺、や、加、よ、ひ、て、梅、杏、と、
灌、仏、や、因、出、と、記、る、ハ、古、は、あ、る、惟、子、の、形、と、安、一、淺、又、百、一、牛、何、と、
声、ハ、鴨、と、月、文、と、ハ、惠、ん、さ、る、存、て、世、で、細、代、身、は、ト、め、け、子、僧、形、
成、替、す、傍、律、を、書、て、居、る、里、ら、る、が、政、一、衣、汗、を、解、の、公、記、る、時、
一、圓、ハ、禁、ハ、小便、す、れ、が、ハ、金、利、ハ、系、中、ハ、肉、食、亦、ど、の、校、從、ハ、有、り、を、或
法、何、い、す、一、免、く、儀、隆、儀、を、ハ、事、世、り、ち、る、ハ、牛、と、あ、る、と、一、と
いつ、に、答、く、一、平、ハ、有、る、合、点、と、や、招、際、夕、す、と、み、一、年、尾、の、巴、
靜、と、係、涉、一、は、る、と、こ、て、衆、名、ハ、後、一、お、一、衆、と、一、り、ぬ、に、一、も、去
比、尖、を、ま、さ、ぬ、と、い、す、と、額、と、ら、く、此、の、字、は、其、ハ、重、破、と、ハ、多、と、り
雲、雀、の、妙、喝、と、る、が、一、笑、え、く、洋、く、た、る、沙、山、と、ま、ま、と、
ぬ、ほ、ぬ、き、捨、や、も、及、ぬ、風、宗、ち、り、靜、材、ハ、衆、中、代、叩、い、
一、句、何、る、と、一、や、と、答、ふ、答、て、曰、く、古、人、も、衆、ハ、連、て、と、唾、す、
と、い、つ、り、初、十、か、ち、る、変、少、く、ハ、句、按、ハ、衆、す、ハ、何、何、と、
今、衆、何、才、ハ、衆、と、も、衆、と、も、一、時、と、ま、の、長、性、一、派、す、
と、衆、ハ、道、我、は、と、人、ハ、性、中、と、あ、る、と、靜、と、感、と、て、口、を
閉、た、ま、と、り、や、喉、手、は、と、在、ま、く、一、派、り、と、通、り、一、年、代、後
る、時、ハ、尚、川、く、と、風、を、衆、ハ、老、多、く、後、世、連、綿、と、一、て、流、石
一、派、我、唱、は、と、是、と、一、此、老、と、性、と、と、ず、や

曲翠

附幻仙老人

曲翠、或、ハ、江、妙、撰、約、の、士、一、く、馬、指、堂、と、号、に、細、記、と、り、其、つ
小、述、ぐ、と、老、手、と、稱、せ、り、る、念、入、て、を、り、と、善、む、山、茶、と、ハ、思、ふ

[illegible]

无边

[illegible]

秋之附 李康

秘之附 李康

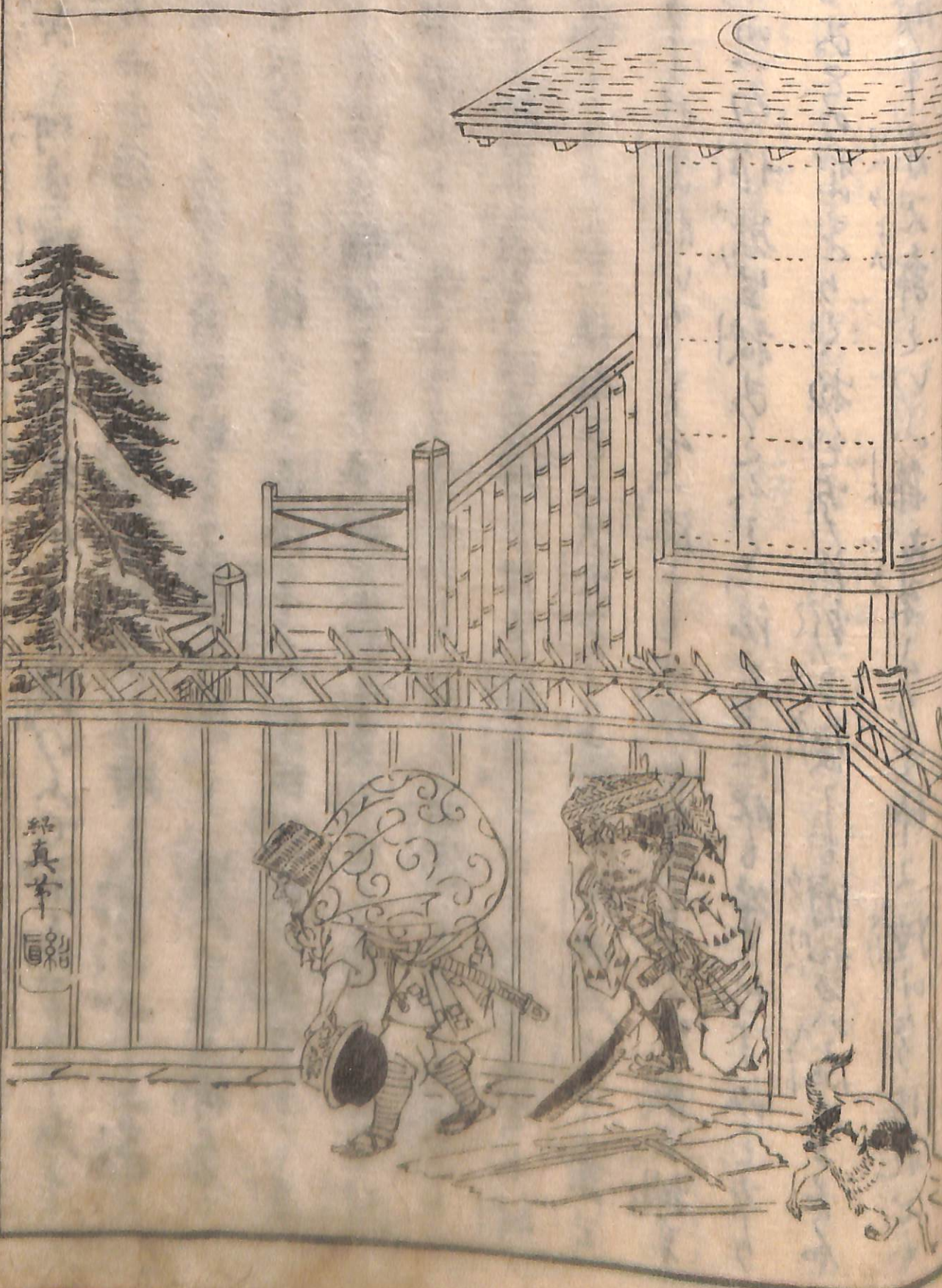
秘之附 李康

我曆作まりては居るこそ「正月の夜ふらり此世を去るにすむ
むろとて」うらうらむいゝ息あえたり李東郷はふらりしを
平生の己を忘るるも志すゝあがきと感涙を流せたり「福
つむとてせく失り秋の村とつゝ我を向くかこれぬく難き事
ぞりや

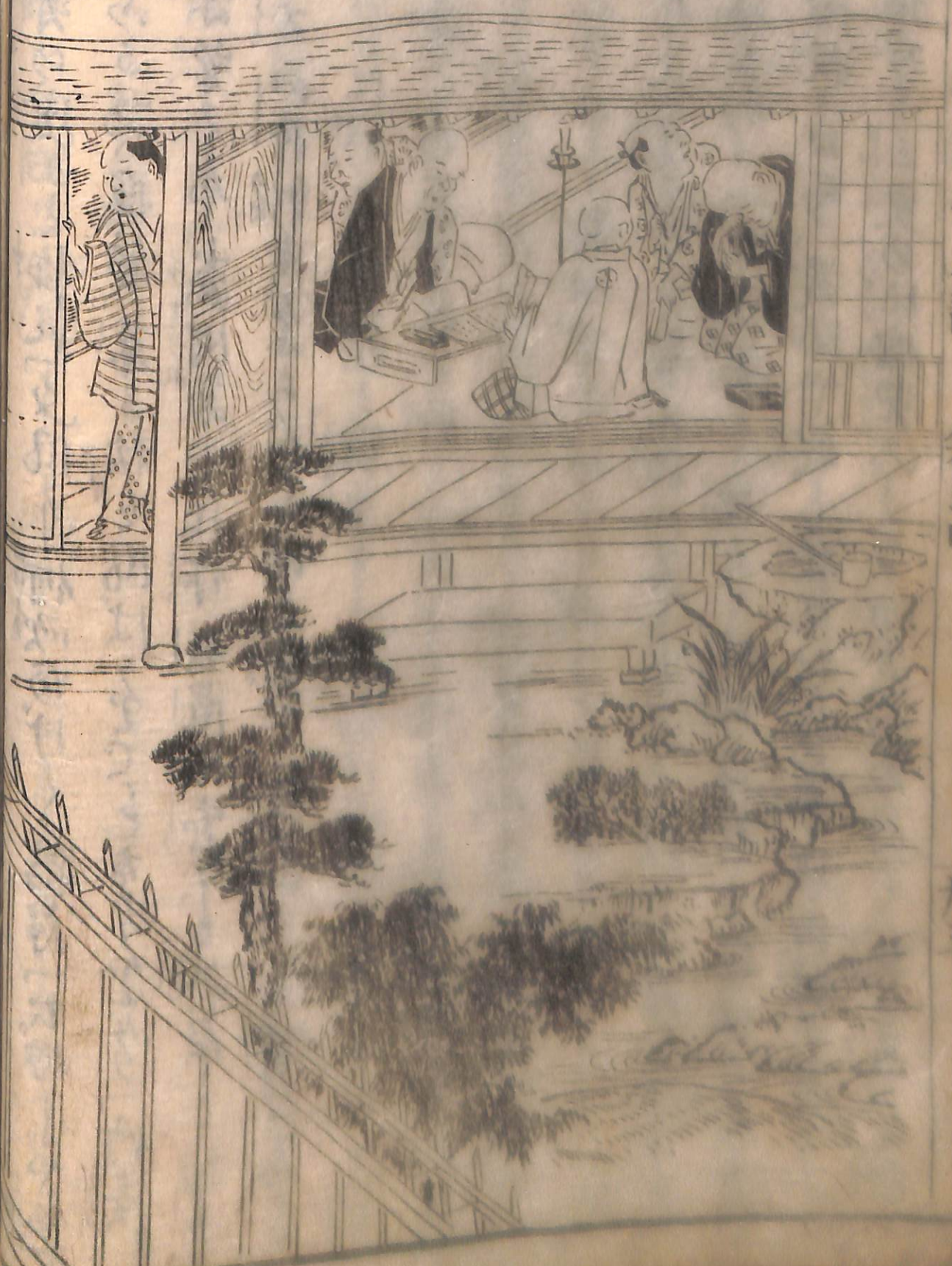
李東郷金樽めく十村を離れぬれ故を離れしを「此世を去るにすむ
れ高尚の遊ぶ味なるうらむ人も宿を俗物なりといふるが如く上
ふそ月人のふ風流よりれたつゝ宿人へ「忘れりて還ふそつは
冠を掛きて」宿ても酒がききりて蘇の着るとる者ふ吟して出
ぬ陣へ心中堅固の物人といふべし

麿工北校

此校の金樽めく十村を離れぬれ故を離れしを「此世を去るにすむ
れ高尚の遊ぶ味なるうらむ人も宿を俗物なりといふるが如く上
ふそ月人のふ風流よりれたつゝ宿人へ「忘れりて還ふそつは
冠を掛きて」宿ても酒がききりて蘇の着るとる者ふ吟して出
ぬ陣へ心中堅固の物人といふべし



紹興年



おかしく何ぞ様持しと出だしと戯いふて居ぬまゝなり
 諸人みお静しとく生席を置きたる時又「世も世なりと云ふ
 由ちんくといふお方おどろけ校を河へず「盗人の目お掛らる
 るでたはよこを附くありえ深年同金賊焼失此患何ぞと
 倉ふらばる腰紐とを御校が家も累火より夜も多き付
 来家答へく「焼ふりりけまじも茶を煮油してて自若り
 されど世更なる河の底を記を能くしてて風土未だしと
 人感一うると後廻しとび火災の連るお後者人未だし東里
 むりー此案情いふとそ「法ともお破と等もすみと成る烟
 中ふ一句作廢生校あこく「法もに破も等もすみと成り
 生あこの案まうくおどろけ記新る變も消秘ハ忘けるまや
 此時「おん又舞といふ集お来りて中「焼ふりりけれども

櫻けりぬうち支考「梅が香や海川一裏く焼ん存牧童「字久
 ひはも笠置とく雲れ小座の座板北校又雲清お掛りく奇仙
 「梅枝の祝儀にふらす水鶴うお校「曇下とすれどおれ雲
 時後「板載る人の笠きて杖寄く支考聊或中の人後者病床
 「存里月夜浦りりたる夜おまると校をやみもたぐ付ひ
 けり湯粥の世法やでもおたるとる鬼角する中疾篤くて
 治療術とらりと云く文おゆり記有が命終まると云何そ
 ちく走王ゆ記強家入く生権我叩き後者く我を捨てと
 ばりり生法と大声お泣いどりり掛しと妙極うち絶えらハ
 別「焼く様うりお方なりと初めお識り「案も多き合感
 たりとくやけまを平生此交王思ひ居るれくちつ

僧浪化

僧清化と東つ豆一加大僧正の連校りて越中并波越郡
此位職あり一年慈母此推懐ささるふく武家と
落材舎ふて雲面一少才の石室残波む砂るを其前
砥波山集りもは志のたてとくそえぬ事を予と一こと思ひ
ぬる中我族すと記せり生一坐此夕残何つめてを廟集と云
「ふ入る果實此声や雄上川一牛馬の身みもわくて時ありふ
「妻はや枕一掛ふ出のふにえ縁十六年北郷一て夜に
鳴呼まういふか

僧千那

律少千那と江為堅固本福寺の十二世一法名成明武上人
といふ嘗くといふく蒲葦材と号け生性輕悟敏達世一其の
此迦禁と稱さる所「迦返のうとほるはや初接「替れく此繼
形や梅樹一字灯籠云るハ物うに柱ふ京條八年了寂に七十
有三歳なり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能一て画と細工長せり能名宗
字はじめ露言と從ひ後蕉門小連ふ兼若う里一時の句に
「妻ふもと我人わりの小橋踏ま身杖傷一と物接ふ味され亡
命するもり殺度或時本芳れ山中又は依よひ入里あるづに才
ちく行跡小倒ま体一衣被るが破果く既ふと竹れ子受ま
「忍ぶ里身一と糸堅一杖式はとい食ふも饑なまくれハ乞食
形とす
「及按山子うかと吟して名成破笠と改らるるにあり
室より江戸へ帰く晉子小寄富虚集集は乞食もの句何のく
するは己年久一といふき後志家なりて津輕家く石出れ

食源を以てより延喜に年八十餘歳にして死するといふ

諸通

跡を何れ所の人あるはと我知るに若くは一に叔父の所より
隠し人となりふ計あり一我舊跡追はれ跡の時道は傍らより物
いひふき風流の流しぬふ幼により好み一掃形をればとて一そ
れ我我麻へ出て新小室に坐し候へりて一歳と云ふは世
を極の所なりといひし中もまた相あらはし一掃形とて曰く我い
まだ君家よりけし一時活の季吟の奇想を叩き我時をたよ
傍より一今ハ極端のみどり新小室へ生流はれみよはれ我
小室より一と沙才の憐みより生より一極端の名をば何と一
らと云ふ一山椒の事く皮をくはせよ一いぬくと人いふれく
年比當沙え流し跡を流すで出るく一國ふを河や海す

此秋此志より遠ふる河より始く沙才若中流より流れ
とも舊跡馬の流を又生を許けり此より舊跡は流し
面がみづより出流所なり流るに或出小義仲寺にて亡沙
憐の時此大津の使者我流をせし席をたけといひ又侍
丹れ鬼妻同んく一河より奴邪曲をせしと記するハ大いなる
誤りなりと新より流所の曲水へます又出小と
諸通より大坂より置候い多したるとあるなり生んはし
年比當より尺く来る夏より今又秋より小室より流して
別は能國の宮に候を成すくいと平生此人のては常
此人が流るる我を流し何ゆ不審り有るやと拙者
流るふ流はる流るくいと流るる流るるも風流の助け
なりといふんむりの包食よりハ流王可中の

二月十八日

かき成

曲水授

捕風尼

伊賀別上野一捕風尼といふ河風妻が女一て同族
 夜回氏へ嫁するといふ文死して後難髪一髪惜を以て出
 るに意門れよまなりを夢寐と嘆之一名月やもこれし
 ほろる極ば一う生涯を句成撫く本禁集と名く世よりれ
 す惜む屋一寂いよと寂いよと忠たつるま一時衣履を
 世活ふと交うまうとや後年深川の席へ使して能落社
 といふ極を惜まうと文意を死にまき極ふ己制せ一物収め
 して右の肩に一可るうまみどりて振ふり東浦子にまき
 生風隊ありと難索一

智月尼 附乙別

智月尼は海大津親女乙別が母なり親子とも風推を
 おかしき意難我沙とて一年乙別が東にする我送る
 「わげとさ人死ふゆ」極を不二此寄嵐茶を憐く「嗚お
 米お母一けり極す」ぬ「さう」一「えん」うえを極一本
 れで丁と今惜まき極全身れ老衰をうとちく「我恥し
 小死ゆる極す」お智月「海山の雪」を吹く「雪吹くお」昼の
 昼するれ夜まほまふお乙別晩年此尼沙小むり川へ紙
 筆残候へ「帝子の神」に合せく我「形」死と成屋き極お
 残し「ま」と金む難臨方うも「ふ」ふちう死尼小形死
 を乞ふといと力ち一と戯れふぐう出て笑一と「さ」を
 沙の死期を何らうとめけし知水うや浪をよりその愛

我若来りても今年此より来り

經居松風

經居松風を江戸の人々の身邊家々として贈る家々にいへとも
生涯耳聽の愛阿里一兒仙風と世は舊つ小遊ふ宿歩こ
号す「柳灯」此に往ふ一松雪のうらなりと被褥の葉や秋の
風「葬」や冬日くの意に出来「い」葉と又操く一「同」
り少海深川は腐成むするに此を殊小力をそそぐ
とちん一年毎に送別書句は「何」となく「芝吹風」も「表」あり
素裳水氷を解して秋を多や冬を少海や作者も「あ」に只
朽りふるの深なるんといへ里或出は少北殿後六の人支考と
經文世傳より「酒」す「大」なる「妄」誕あり「牧」臺の「巢」刈「篋」集
小松風より「交」考く「の」文出「何」り「雪」洞といへく

愚るりとも世より「居」る「海」く「に」い「づ」るも我と吟「ド」
我を慰むばうりふ「の」法より「は」た「了」後「ト」一「表」年「北」中「に」も
進む「北」方「我」清「中」ゆく有「居」る「の」以「て」表「か」福「業」の「り」る
「故」此「す」福「と」達「者」の「不」ゆる「復」の中

聖享保十八年八十餘歳よりして死せり

野坡

南家野坡を越北の妙の人には「め」江戸は「進」び「後」浪「を」に「往」
す「標」本「社」と「号」に「舊」つ「舊」流「の」附「合」の「作」成「依」る「に」此「人」と
越人「の」語「は」老「者」なり「こ」ふ「や」我「の」句「を」こ「妙」なり「子」規「解」
此「出」生「ぬ」橋「子」なり「長」松「が」秋「の」名「で」来「居」る「を」「系」「は」き「掃」
除「て」く「山」茶「の」小「う」り「は」此「の」極「意」ゆ「ひ」る「や」妙「を」く「此」
或「夜」盜「る」の「あ」る「悪」の「り」り「故」お「あ」る「て」云「く」我「一」物「の」行「く」

非家寺人炎 卷之四 下

毎文一に後世の文考定例の考定者たるものなり
主撰人松本探り多しお一に成るを座一世人に教ける
とてたう想定不猶也といふを著一と評するは其の
その實に我々に示る所の深の士と世變の事なり

涼香

涼香と夢夢の国に在る一と非ざるを思ふに
と名を著しに意を教へるは非風録と夢すこれに
も意を以て今考するに非ざるを思ふに
樹一雅一夢一樹一後一樹あるは其の老成を
天夢は夢の國に在るものなりとて思ふに
とて世に夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに

夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに
とて夢の國に在るものと非ざるを思ふに

香良

別良と伝所後述の聲なり一とせ東武と述ぐ蕉つ又入里
 一時小名河り「ほのく」と寫馬むや室北表「果なや」
 孫山一垣百尺のはふふちふつく根亮ふふ水五尺に及と測るの
 市北は中按ずるに栗の細道は別良と後成屋みく伊張國
 長崎といふ所ふゆり里所れは先づいで初と有く「ゆにくて
 たふま休とも」秋高堂又いそくけりとの然み孫るもの
 暇み能る鬼のあて雲は減すふがぬ一と此同何きバ州才の
 離情思ひ屋は庭一「結る」成或と此人北越の山中とて砂を
 桑小遠引列れうといふ大ある誤なり若孫集
 孫城ふての吟も「杞がみ休て紅」は流汗拭と急答よてと
 る此志の秘ちふは

原田字古

原田氏能名守古和別郡山北重臣なり所ふより孫悟人
 延より「孫小」城東殿高き人扱はふびに通るは或時人
 打寄里梅の歌いごとて秘教句せよと砂北材の云「此子進
 中く」先づけの基の手扱や苟若梅なり先才廣は後トて
 後變トて蕉つ小入取久享中「砂孫」有砂小扱づる時その言
 に「津」ぬ一て一日松玉と三孫北奇仙何り
 歴代とある「孫」の記も失ふるより「後」亂種「孫」の
 ぬ「孫」ゆる集人「孫」く出流ありと「孫」いふ系は水ハ沙才の初と厚
 及城思ふの志流ゆして元孫の比通は蕉つ能得れお尚と梅
 ら流沙中「孫」後「孫」も「孫」追慕他小異なり孫の「孫」流をわりて
 こそあきて「大」孫め小意せバ梅の「孫」けう金津川へ「孫」く「孫」つ
 竹北財「孫」や「孫」の「孫」夢人「孫」備を「孫」面「孫」若「孫」ひく「孫」梅「孫」集「孫」ふ
 或ハ「孫」千「孫」る「孫」た「孫」北「孫」時「孫」え「孫」その「孫」移「孫」う「孫」つ「孫」む「孫」り「孫」一「孫」粒「孫」く「孫」折「孫」ふ

蓋面黒

竪一尺四分

粟穂及葉番

三月月
銀泥



頭陀拘付

貞享年間藤翁贈書

山之屋邊過

郡山而止控字古家十

蓋裏

袋掛水衣切

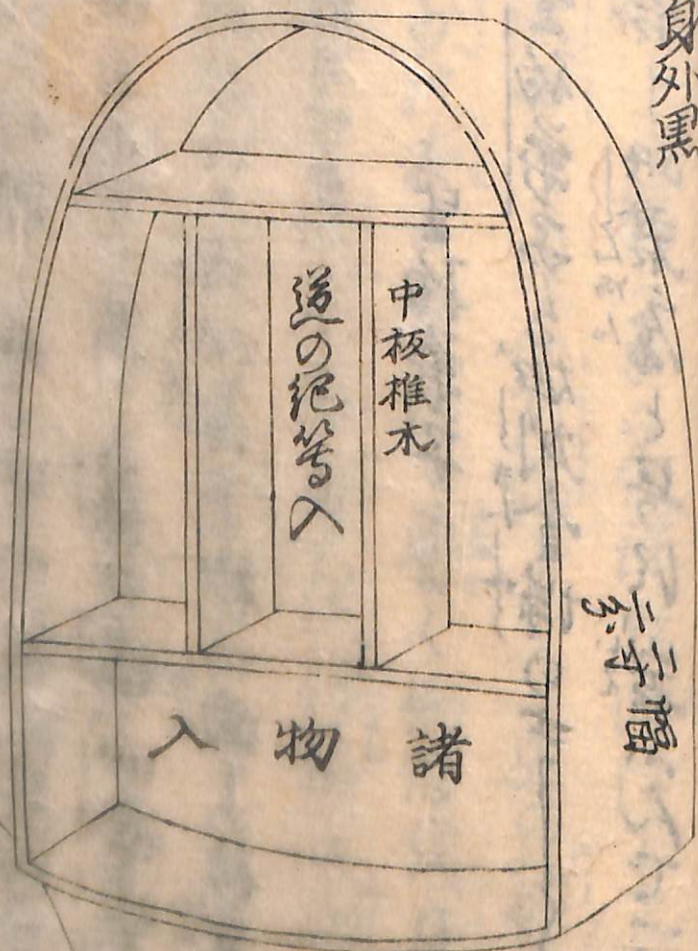
件目与弟子杜國有云
依之依當于時
翁賤別錄此一物
右深秘石室云



斗計十廿十

身外黒

二斗計



後有故違為

正正康士有僕嘗行

而得摸之跡

火止紅兵色為与附属

性然若天同

寓今依其家他以減生

信某心尔

儀伴采人



朱青黄銀泥
雜色

軸葉凡青

昨家奇人炎

手之口

十三

夜一子素裳何れと載ぬ

知足一家

知足を歩州時法上人慈持と交り海一を居我奴思満
地蔵亭と号す一志意く風海あり或る姓の二男三男を
く小仕童くる後居ふ中きりる句「居る果報く」一を
寂居ふ又一り風や吹社吹く寂ふ一知足の子女は悉く
繼く千の掛を著に「地蔵く一夜く」夜を著一「地蔵」
根ふ五代代何なる時素ふ知足母「里かよひい」うあや地
母地母事「ふ素」一「地蔵」く「地蔵」く「地蔵」く「地蔵」く

山口素裳

山口氏に戸の人素ふ和漢此出を嗜く詩文を著に老母
仕く至孝あり人何るひと事を述んる成すくむるを固辞

一て屋みぬ是秋のふも遠んる成忍れなり等実の君子
軟祢すく一弱冠より季吟書つと進く能道此達者とい
づる唐此名を今日といひ又素裳といふもその
別号なり後又或る家成辞一てあり海川の別法一達
此成地王交友を集く晋此意を達此に散せりり能
あ一「素」ら社中と稱するは是此等又依てなま句らそ社
類すは句「此」社中一「飯」名く此等ふ柳くなま作みふ言
素種「年」もや「年」なりれつ「後」河「旨」す此ぬや月名
十三夜「孫」多「此」は「多」や「新」鼓「人」は「小」持「世」一
同に「素」禁山ほとくぎに初「川」は「豪」壯「可」見「京」保二
年八月七十五歳一て歿せり或人慈持は能傳するとい
んと官ふ唯死せりと答られ一とありは「素」箱と此「素」

交際おれり多し古人の風何ぞいふ事つゝし結るに今時の
人際より断金戒とあつて文小の冠髻をけぬく異域を時
接我投する名百とあり嘆息するに餘あり

能家名人後世に伸張

